嘆仏偈

蓬茨祖運

蓑輪　秀邦　補訂

目次

はじめに……1

一、光顔巍巍　光顔巍巍として、
威神無極　威神極まりましまさず。
如是焔明　かくのごときの焔明、
無与等者　与に等しき者なし。……4

二、日月摩尼　日月・摩尼・
珠光焔耀　珠光・焔耀も

皆悉隠蔽　みなことごとく隠蔽して、
猶若聚墨　猶し聚墨のごとし。……8

三、
如来容顔　如来の容顔、
超世無倫　世に超えて倫なし。
正覚大音　正覚の大音、
響流十方　響き十方に流る。……11

四、
戒聞精進　戒聞・精進・
三昧智慧　三昧・智慧、
威徳無侶　威徳侶なし、
殊勝希有　殊勝希有なり。……14

五、
深諦善念　深く諦かに善く、
諸仏法海　諸仏の法海を念じ、
窮深尽奥　深を窮め奥を尽くして、
究其涯底　その涯底を究む。……17

六、
無明欲怒　無明・欲・怒、
世尊永無　世尊永くましまさず。
人雄師子　人雄師子、
神徳無量　神徳無量なり。……21

七、功勲広大　功勲広大にして、
智慧深妙　智慧深妙なり。
光明威相　光明・威相、
震動大千　大千に震動す。……25

八、願我作仏　願わくは我作仏して、
斉聖法王　聖法の王と斉しからん。
過度生死　生死を過度して、
靡不解脱　解脱せずということなからしむ。……29

九、布施調意　布施・調意・
戒忍精進　戒・忍・精進、
如是三昧　かくのごときの三昧、
智慧為上　智慧上れたりとせん。……32

十、吾誓得仏　吾誓う、仏を得んに、
普行此願　普くこの願を行ぜん。
一切恐懼　一切の恐懼に、
為作大安　ために大安を作さん。……36

十一、仮使有仏　たとい仏ましまして、
百千億万　百千億万、

無量大聖　無量の大聖、
数如恒沙　数、恒沙のごとくならん。
供養一切　一切の、これらの諸仏を
斯等諸仏　供養せんよりは、
不如求道　道を求めて、堅正にして
堅正不却　却かざらんにはしかじ。……40

十二、譬如恒沙　たとえば恒沙のごときの
諸仏世界　諸仏の世界、
復不可計　また計うべからず。
無数刹土　無数の刹土、
光明悉照　光明ことごとく照らして、
徧此諸国　このもろもろの国にあまねくせん。
如是精進　かくのごとく精進にして、
威神難量　威神量り難からん。……45

十三、令我作仏　我仏に作らん、
国土第一　国土をして第一ならしめん。
其衆奇妙　その衆、奇妙にして、
道場超絶　道場、超絶ならん。
国如泥洹　国泥洹のごとくして、
而無等双　等双なけん。

我当哀愍　我当に哀愍して、
度脱一切　一切を度脱せん。……49

十四、十方来生　十方より来生せんもの、
心悦清浄　心悦ばしめて清浄ならん。
已到我国　すでに我が国に到りて、
快楽安穏　快楽安穏ならん。
幸仏信明　幸わくは仏、信明したまえ、
是我真証　これ我が真証なり。
発願於彼　願を発して彼において、
力精所欲　所欲を力精せん。……53

十五、十方世尊　十方の世尊、
智慧無碍　智慧無碍にまします。
常令此尊　常にこの尊をして、
知我心行　我が心行を知らしめん。
仮令身止　たとい、身をもろもろの
諸苦毒中　苦毒の中に止るとも、
我行精進　我が行、精進にして
忍終不悔　忍びて終に悔いじ。……57

あとがき……61

凡例

一、偈文ならびに書き下し文は『真宗聖典』（東本願寺出版部）によった。
一、漢字は原則として通行の字体にあらため、読みやすさを考慮して、漢字をひらがなに、またひらがなを漢字にするなどした。
一、脚註は初出の箇所に付して、二回目以降の場合、初出の箇所を参照できるようにした。
〔例〕（本文14頁）威徳　→⑳を参照。
一、『真宗聖典』からの引文については、文末に「聖典〇〇頁」と表記した。

はじめに

謎の人間

人間はなぜ生まれてきたのだろうか。そして、何のために生きていくのだろうか。私たちは生まれたために死なねばなりませんが、生まれて死ぬまでの間、たのしくすごせばよいというものでもないでしょう。現代の大きな問題である差別・貧困・孤独・自死なども、その根本に、この人間という存在の謎がひそんでいます。生物学上、生理学上、あるいは社会科学上に人間というものが説明されていますが、ここにあげた問題に対しては答えがありません。たのしむことだけが人生の目的なら、戦いをたのしみとする者には、平和は目的に反することであります。そのために一方では平和に働くことが

壊されて、地獄の苦しみに生きることだけが人生となります。

ではたのしみだけが目的でないのならば、一体何が目的か、この謎を解いて人間に生まれてきた意義を明らかにし、至上の満足をめぐむ道、それを教えられたのが仏陀であります。

釈迦如来は、その道を伝えるためにこの世に出られました。そして、生えては枯れ、生えては枯れる草のように、生まれては死に、生まれては死ぬ矛盾にいつまでも苦しむ人間に、真実の大利①、無上の道をめぐまれたと『大無量寿経②』に述べられています。それによれば、釈迦如来は私たち一人ひとりの、今日と、人間に生まれてきたその遠い遠い過去世の縁を思い出しつつ、法蔵菩薩因位のとき③、阿弥陀如来④が超世の大願⑤を発して、無上甚深微妙の法⑥を成就して、これを六字の尊号として私たちに回らしてくださったのだと語り出されるのであります。

①**大利**　大いなる利益のこと。

②**『大無量寿経』**　親鸞聖人が「真実の教」といただかれた経典。『仏説無量寿経』のこと。『大経』ともいわれる。

③**法蔵菩薩因位のとき**　阿弥陀如来（果）となる以前の法蔵菩薩（因）の位のとき。

④**阿弥陀如来**　はかりしれない智慧と慈悲のはたらきをもった如来のこと。

⑤**超世の大願**　世に超えてすぐれ、また、衆生をして世を超えしめる阿弥陀如来の願いのこと。『大経』では四十八願として説かれる。

⑥**無上甚深微妙の法**　このうえなく（無上）、はなはだふかく（甚深）、こまやかでたえなる（微妙の）法のこと。

大昔のさらにその昔、釈迦如来よりさかのぼって五十三人の仏⑦が出られたまたその昔、この世に出られた仏を世自在王仏⑧と申します。

そのときに国王がおられ、仏の説法を聞いて、心にいうにいわれない喜びをいだかれました。国王とは人間が求める富、権力、武力、その他人間の欲望を満たす絶頂の象徴であります。しかし、それも人間みずからのもつ生死の苦の前にはもろいことを知っていた国王は、仏の説法を聞いて、はじめて生死の苦の本を抜く道のあることを知ったのであります。ただちに王位をすて、一出家の身となって、仏のみもとにまいりました。今さらに仏の清らかさ、智慧の光の極みなき姿に、私もこのようにありたいと願って、うたをもって仏の功徳をほめたたえられました。それが「嘆仏偈」であります。

⑦**五十三人の仏**　釈尊以前に出られた過去五十三仏のこと。

⑧**世自在王仏**　法蔵菩薩の師である仏のこと。本文では過去五十三仏よりも前に出られたとあるが、五十三仏の次に出られた仏という了解もある。

一、光顔巍巍　光顔巍巍として、
威神無極　威神極まりましまさず。
如是焔明　かくのごときの焔明、
無与等者　与に等しき者なし。

『大経』の立脚地

久遠劫⑨より久しき仏は、阿弥陀仏なり。かりに、果後の方便⑩によりて、誓願⑪を儲けたまうことなり。（聖典八七三頁）

と、蓮如上人の『御一代記聞書』には述べられています。法蔵菩薩と聞けば、まだ仏にならないときの菩薩、仏になるために発願し、修行されているもろもろの菩薩の一人と考えるのが一般的であります。そうしたもろもろの菩薩の中の一人が修行成就して、十劫の昔、阿弥陀仏となられ、現に西方極楽世界にましますといわれてきたの

⑨**久遠劫**　劫はきわめて長い時間のこと。はるかに遠い昔。

⑩**果後の方便**　法蔵菩薩（因）となって衆生を救おうとした、阿弥陀如来（果）の手だてのこと。

⑪**誓願**　衆生を救わんとして誓った願いのこと。ここでは四十八願を指す。

で、現代では神話のように考えられ、人間との関係が感じられなくなっていることも事実です。しかし、先の蓮如上人のご注意によれば、法蔵菩薩は一般的な菩薩が因より果に向かう立場であるのと異なって、仏の位より因に下った菩薩、衆生済度⑫のために国王となり、出家して沙門⑬となり、世自在王仏のみもとにおいて大願を発された菩薩であるということがわかるのであります。

その意味で宗祖は『大経』について、

如来の本願を説きて、経の宗致⑭とす。すなわち、仏の名号をもって、経の体⑮とするなり。（聖典一五二頁）

と、述べておられます。これに対して、昔から一般に『大経』は菩薩の本願を説く経とみられ、われわれ人間との関係は直接には考えられなかったのです。

⑫**済度**　苦しみから救い、さとりの境地へ導くこと。

⑬**沙門**　出家して仏門に入り、修行するもの。

⑭**宗致**　かなめ。核心。中心。

⑮**体**　全体をつらぬくもの。本質。

光顔巍巍

今、法蔵菩薩は世自在王仏のみもとで、衆生済度の大願を発されるにあたって、まず師である仏の徳をほめたたえ、世間がうらやむ王位も塵芥⑯に等しく、身をかざる宝玉も礫にすぎぬ、自分もこのような仏になり、生きとし生けるものに、あまねく同じ喜びを与えたいと願われるのであります。

菩薩の本願には、総願⑰と別願⑱とがあります。今この「嘆仏偈」は総願にあたり、四十八願は別願にあたります。法蔵菩薩は、まず師である仏の徳をたたえて「光顔巍巍（仏さまのお顔は、そびえ立つ山のように輝いておられます）」と述べられます。その智慧の顔容⑲は神々しく威徳⑳に満ちて極まりがなく、そのさとりより出る光は一切の苦悩の衆生を救わんとの慈悲に炎のように明るくもえ、

⑯**塵芥**　ちり、あくた。取るに足らないもの。

⑰**総願**　すべての菩薩がもつ共通の願いのこと。

⑱**別願**　それぞれの菩薩がもつ個別の願いのこと。

⑲**顔容**　顔かたちのこと。

⑳**威徳**　おごそかでおかしがたい徳のこと。

衆生の貪欲㉑や不満に支配されている暗い心を照らすこと、他に比べるものがないとたたえるのであります。

㉑**貪欲**　財産などをどこまでもむさぼり求めること。